

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊27年目

創刊1989年 Nr.308

2015年2月号



Diego Velázquez (1599-1660) Infantin Margarita (1651-1673) in Blauem Kleid 1659 Öl auf Leinwand, 126 cm x 106 cm

ウィーン美術史博物館 特別展『ベラスケス』 2月15日まで開催

© Wien, Kunsthistorisches Museum



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 41



昨年十二月十四〜十八日にかけて、日本原子力学会熱流動部会の主催、国際原子力機関（IAEA）の協力、及び米国、韓国、中国など十一ヶ国の原子力学会と国内二機関の共催により、原子力熱流動、運転と安全性に関する国際会議が那覇市郊外の沖縄コンベンションセンターで開催された。二十五ヶ国とIAEAから計三〇七名の参加があり、うち我が国からは産業界、研究所、大学等から二〇六名の参加があった。本会議は、二件の

総合講演、パネル討論十件の基調講演及び四十八のセッションより構成され、計三三八件の論文が発表された。我が国からは七二件の論文発表があった。パネル討論では、福島第一発電所事故後の原子力熱流動及び安全研究の展望について、各国の専門家が見解を述べた。これまでで最大規模の参加があり、議論も活発で成功裏に会合は終了した。会議終了後の十九日には沖縄科学技術大学院大学への技術シニアが実施された。

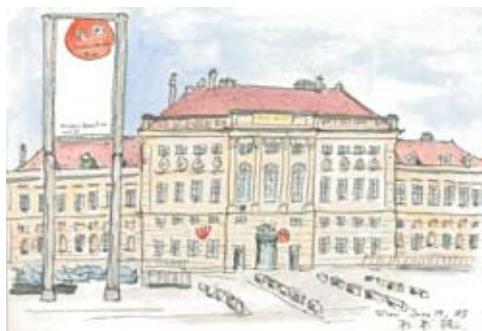


筆者はシビリアンアクセシビリティ関連の二つのセッションで座長を務めるとともに、若手の発表者に対して率先して質問やコメントをして議論の活性化に少しは貢献したと思う。将来の国際会議の開催や研究協力について、内外の研究者と情報や意見交換をする良い機会だった。また、熱流動部会長として閉会の挨拶をするなど晴れがましい場面もあったが、北京の国家原子力ソフ

トウエアー開発センター長を務められていた原子力機構炉心損傷安全研究室の研究仲間と再会したことが個人的な特記事項である。会合前半は時ならぬ嵐に見舞われ肌寒かったが、後半は沖繩らしい暖かい天候に恵まれたのが嬉しかった。沖繩は平成九年の原子力学会以来十七年振り二回目だったが、最終日の午後に首里城を初めて観ることができたことも幸運だった。

さて、今回のウィーンと京都の対比では、国際観光都市としての両市について述べたい。二千年の歴史に育まれてきたウィーンは、音楽と芸術の都、典雅な宮廷文化に彩られた古都として多くの観光客を内外から集めている。二〇一三年上半期の宿泊客データによれば、通年換算で約二三五万人と史上最多の観光客がウィーンを訪れている。このうち隣国ドイツからの観光客が三二九万人と最も多く、ついでオーストリア国内から二二二万人、ロシアから七三万人、米国から五五万人と続いている。我が国からは二七万人が位とアジアでは最も多い観光客がウィーンを訪れている。ベストテンで欧州以外の国は米国と日本だけである。宿泊観光客の八割以上が外国からというのがすごい。

一方、京都の二〇一三年の宿泊客数は、一三〇八万人と過去最高の二〇一〇年の二二二〇万人とほぼ同数である。このうち、国内観光客が二九五万人と九割以上を占める。



外国からは東日本大震災の影響から回復し、史上最多の二二二万人が京都を訪れた。ただ全体の九割弱と国際度ではウィーンに遠く及ばない。国別では台湾から二四万人、米国十六万人、中国十二万人と続き、アジアが全体の四六％、欧州が二三％、北米が一八％を占める。一昨年に和食が世界遺産に登録された。昨年には米国の旅行雑誌で京都が世界の人気観光都市一位となったことから、二〇一四年は記録を大幅に更新すると推定されている。両市の宿泊観光客数がかつて一千万人超と同程度なのが興味深い。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、観光客としてではないものの、観光名所を訪れたり、オペラや美術の鑑賞を楽しんだ。現在住んでいる京都でも学生時代も観光名所を時折訪れていた。歴史と伝統を誇る両市の観光名所に接することができた幸運に感謝しつつ、ウィーンの観光名所の一つであるミュージアムクォーターを描いたスケッチを掲載させていたたく。

（訂正）先月号で「二〇一二年の山中教授」と訂正させていただきました。

■杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長